

耳元で
ささやいてくる
時間も無視して
ボックスの存在も無視して
むき出しの電話として
明日会おうとか
気分が乗らないから
やめようかとか
意識不明のままに
約束をせまる

それでは
携帯電話とおなじ
ではないか
という
疑問もあるかもしれないが
超電話ボックスは
どこでも電話として
確実に存在している
携帯電話の通じない
海底でも
超電話ボックスは
耳をわしづかみにして
離さない

寝言でも電話をしてしまう私は
超電話と
ボックスの調和した空間で
ノイジーな暮らしぶり
ジージー言葉で表現する
悲しさも
所詮は
電磁波の乱れだ

うなぎ

その人の名前がトニーでも
格別に違和感は無かった
白系ロシアのハーフで
日本人の血をまったく感じさせない
顔立ちだったから
それなのに
カクテルの知識をひけらかすような客には
東京訛りのやや早口で
意地の悪いことを言ったりもする
カウンターの向こうの領地では
いかにもバーテンといった
恰幅のよい長身の
背筋を
やや反り気味なほどにピンと伸ばした
気持ちのいい立ち姿で
店の隅々まで目を行き届かせていた
ここでの過去形の使用は
彼がすでに数年前に死んでいるからだ
店は姉のベティさんが続けているのかもしれないが
私はもう足が向かない
暇な時間にトニーさんと話している
死ぬよりだいぶ以前の入院の時には
病院食がまずくてたまらなかつたといっていた
糖尿の血筋で何度か入院をしていたようだ
「退院して一番に食べたのは何ですか」と聞くと
しみじみした様子で
「それはね
うなぎでしたね」と
やっぱり
東京の言葉でこたえたっけ



2004年7月31日刊
発行人 中上哲夫 〒220-1103 神奈川県相模原市橋本4-11-10-408
淵上熊太郎 〒414-0002 静岡県伊東市湯川522-1
插画 原哲弘

うなだれた七月

ラジオになりたいと思ったことが
ないとはいわない
私だつて
潜在的にはラジオの男だ
だけれど
いくら雨だからといって
七月の午後に
あんなにうなだれて歩く姿を見てしまうと
私はラジオになるには
修行が足りない
というようなことを思ってしまう
伊東屋の裏の通りを
松屋の方に歩いていったけれど
なんだか
後ろ姿を見る気がしなくて
私は昭和通りに向かって歩いた
とくに
その方面に行く
用事はなかったんだけど

2004年7月31日刊

発行人 中上哲夫 〒220-1103 神奈川県相模原市橋本4-11-10-408

淵上熊太郎 〒414-0002 静岡県伊東市湯川522-1

挿画 原哲弘

WANTED

けふり撒きながら

新宿や渋谷の雑踏をふらふら歩いていた男

ボタンのとれたシャツ

と穴のあいた左右別々の靴下

映画館の看板やポスターをぼんやりながめていたり

百貨店のショーウィンドウに映った自分の影を見つめていた男

公園の公衆便所で顔を洗って「いたり

うつろな顔でベンチにすわって

パンの耳をひきちぎって鳩に放っていた男

本屋の棚の間をぶらぶら歩いていた男

坂の途中の古本屋で文庫本に読み耽っていた男

図書館の閲覧室で居眠りしていたり

酒屋の店先で新聞を読みながらビールをのんでいた男

ジャズ喫茶の暗闇で夢遊病者のように体をゆすっていた男

レコード屋の前の歩道でアメリカのポピュラー音楽に耳を傾けていた男

百貨店の階段を屋上まで登っていつて

降りてくるよ

ふたたび登っていった男

突然大声を発して走り出したり

横断歩道の真ん中で空を見上げていたり

倒産した銀行の石段で猫に話しかけていたり

ぶつぶつ意味不明の言葉をつぶやきながら信号が変わるのをじっと待っていた男

いつも香具師の輪のなかにいて

とりわけバナナの叩き売りが好きだった男

赤い顔して

(安い酒をのんだのだろう)

左右に揺れながらひとびとの間をたくみに歩いていた男

コンクリートの柱に身をもたせて

酔いをさましていた男

駅の立ち食いそば屋で井の中に顔を突っ込んでずるずるそばをすすっていた男

軍艦マーチ鳴り響くばちんこ屋の通路で玉をひろっていた男

小銭をにぎりしめて場外馬券売場の長い行列に並んでいた男

いま町で見かけたとしても

わからないかもしれない

もう三十年以上かれに会っていないので